

高等学校学習指導要領の改訂と国語科古典教育の動向について

“About The Trend of The Revision of High School Curriculum Guidelines and The Trend of The National Language Department Classical Education”

人文社会学部 人間社会学科

日本語教育学教室

浅川 哲也

はじめに

平成 29 年（2017 年）3 月に『小学校学習指導要領』・『中学校学習指導要領』が告示され、次いで平成 30 年（2018 年）3 月に『高等学校学習指導要領』が告示された。

今回の『学習指導要領』の改訂をめぐっては、「戦後最大の教育改革」というセンセーショナルな惹句がマスメディアを通じてさかんに報じられている。安西（2017）によれば、それは「戦後最大、あるいは明治以来と言われる大きな教育改革」であるという。具体的には、平成 30 年（2018 年）度に「高校生のための学びの基礎診断」が文部科学省より認定されたことを嚆矢とする。それは「義務教育段階の学習内容を含めた高校生に求められる基礎学力の確実な習得とそれによる高校生の学習意欲の喚起を図るため、高等学校段階における生徒の基礎学力の定着度合いを測定する民間の試験等を文部科学省が一定の要件に適合するものとして認定する仕組み」¹である。

現行のマークシート方式によるセンター試験が廃止され、令和 2 年（2020 年）度から新たに「大学入学共通テスト」が始まる。また、令和 2 年（2020 年）度から令和 6 年（2024 年）度にかけて小学校・中学校・高等学校の学習指導要領が改訂される。さらに、現在の大学においてほぼ義務化されている「統合 3 ポリシー（アドミッション・カリキュラム・ディプロマ）」の公表や、他の教育政策、入試改革などが連動し、これらを総称して「高大接続改革」または「高大接続システム改革」と呼ばれている。

¹ 文部科学省のホームページに拠る。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1393878.htm

教育改革としての具体的な目標は「受け身の教育から能動的学習へ」(From passive education to active learning)である²。「能動的学習(アクティブ・ラーニング)」とは、講義を受ける受動的学習に対し、学生が能動的に参加する学習方法のことである。これにより、高校生の学力判定には、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力などを問う問題が導入されることとなり、新しい入試制度においても文章や式を記述することによって思考力・判断力・表現力などを評価する記述式問題が導入される予定であった。³

平成 30 年告示の『高等学校学習指導要領』の学習指導要領改訂の理念は、「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」である。これは「能動的学習(アクティブ・ラーニング)」のことである。この改訂により、従来の学習指導要領にはあまりみられなかった「学びの方法」が学習指導要領に明記されることになり、また、教科目も大きく変更されることとなった。

浅川(2017)では、戦後の国語科教育の教育課程編成の変遷について『高等学校学習指導要領』における国語科の取扱いの改訂の内容について分析した。

本稿は、前稿を承けて、平成 30 年告示の『高等学校学習指導要領』の改訂について、国語科の戦後の教育課程の変遷の中でそれがどのように位置づけられるのか、特に国語科古典教育が『高等学校学習指導要領』の改訂によってどのような影響を受けるのかについて検討を加えるとともに、現行(平成 21 年告示)の『高等学校学習指導要領』によって行われている国語科古典教育の実態とその問題点について分析することを目的とするものである。

1. 昭和 53 年から平成 21 年までの高等学校国語科教育課程の推移

浅川(2017)では、昭和 53 年(1978 年)から平成 21 年までの『高等学校学習指導要領』における国語科の教育課程について、古典教育の観点からみて大きな問題点が二つあることを指摘した。

第一に、教科としての国語科自体の必修修単位数の激減である。昭和 45 年までの『高等学校学習指導要領』では、国語の必修修単位数は「現代国語」と「古典Ⅰ甲」と併せて 9 単位を下ることはなかったにも関わらず、昭和 53 年の『高等学校学習指導要領』

² 中央教育審議会答申(平成 20 年 12 月 24 日)

³ 大学入学共通テストにおける記述式問題の導入は見送られることとなった。「萩生田文部科学大臣の閣議後記者会見における冒頭発言」(令和元年 12 月 17 日)

からは、高等学校の卒業に要する国語科の必履修科目は統合科目「国語Ⅰ」のみとなり、その標準単位数は4単位と半数以下に減少した。これは平成元年度の『学習指導要領』にも継承されている。

第二に、国語科の科目設定の質的な変化である。昭和53年の『高等学校学習指導要領』で設定された「国語Ⅰ」、また、平成11年の『高等学校学習指導要領』で設定された「国語総合」は、いずれも国語科の領域としての、現代国語・古文・漢文の三つを一つの科目に統合した科目である。昭和45年までは、「古典甲」あるいは「古典Ⅰ甲」が必履修科目として位置づけられ、高等学校の国語科における古典教育の機会が、科目として保証されていたのであるが、「国語Ⅰ」という統合科目の出現によって、古典教育は国語科の科目としての独立性を完全に喪失した。事実上、日本の学校教育における古典教育はこの時点で壊滅的な状況に陥った（【表1】を参照）。

その後の『高等学校学習指導要領』の教育課程の変遷を追跡すると、国語科古典教育という観点でみた場合、さらに深刻な状況となっていく。

平成11年の『高等学校学習指導要領』改訂によって、国語科の必履修科目は「国語表現Ⅰ」と「国語総合」とのいずれかを選択すればよいということとなり、個別の高等学校の実情に拠る教育課程編成によっては、「国語表現Ⅰ」のわずか2単位の履修修得のみで、国語科に関する卒業所要単位を充当することが可能になってしまった。「国語表現」は、その「目標」に「国語で適切に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし言語感覚を磨き、進んで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。」とあることから、古典教育には直接関わりのない科目内容である。つまり、ある高等学校が国語科で「国語表現Ⅰ」2単位のみを卒業所要単位とする教育課程を編成したとすると、当該の高等学校の生徒は在籍中に古典教育を受ける機会はない、ということである。

平成21年告示の『高等学校学習指導要領』では、国語科の必履修科目は「国語総合」の1科目となり、「国語表現」は選択科目となった。これは平成元年告示の『高等学校学習指導要領』の教育課程編成に復したとみることができるが、しかし、平成21年告示の『高等学校学習指導要領』では、「国語総合」は国語科の必履修科目であっても、その単位数は必ずしも標準単位数の4単位である必要はなく、3単位または2単位に単位数を減じることが認められている。端的に言うと、統合科目「国語総合」を2単位履修すれば国語科の卒業所要単位を充たすことになる。2単位とは、50分授業が週あたり2回ということであり、現実問題として、統合科目が2単位では、古文・漢文などの古典教育に割り当てられる授業時間は限られたものとなる。高等学校の実態によっては、古典教育はまったく行われない可能性すらあった。

しかし、平成 30 年（2018 年）の『高等学校学習指導要領』では、浅川（2017）で指摘した第二の問題点に関して大きな変化が生じた。すなわち、昭和 53 年（1978 年）告示の『高等学校学習指導要領』以来の国語科統合科目が廃止され、必修修科目が「現代の国語」と「言語文化」の 2 科目となったのである。新設科目「現代の国語」はその科目名のとおり現代国語であるが、「言語文化」は古典教育の科目であり、実に 40 年ぶりに古典教育専門の必修修科目「言語文化」が設定されることとなった（【表 2】を参照）。

【表 1 国語科必修修標準単位数の推移】

昭和35年		昭和45年		昭和53年		平成元年		平成11年		平成21年		平成30年	
必修修科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数
現代国語	7	現代国語	7	国語Ⅰ	4	国語Ⅰ	4	国語表現Ⅰ	2	国語総合	4	現代の国語	2
古典甲	2	古典Ⅰ甲	2					国語総合	4			言語文化	2
古典乙Ⅰ	5												
必修修単位数	9または14	必修修単位数	9	必修修単位数	4	必修修単位数	4	必修修単位数	4または2	必修修単位数	4または3または2	必修修単位数	4

※枠内の破線はどちらかの科目を履修すれば良いという意。

【表 2 国語科の科目の推移】

昭和35年		昭和45年		昭和53年		平成元年		平成11年		平成21年		平成30年	
科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	科目	標準単位数	必修修科目	標準単位数
現代国語	7	現代国語	7	国語Ⅰ	4	国語Ⅰ	4	国語表現Ⅰ	2	国語総合	4	現代の国語	2
古典甲	2	古典Ⅰ甲	2	国語Ⅱ	4	国語Ⅱ	4	国語表現Ⅱ	2	国語表現	3	言語文化	2
古典乙Ⅰ	5	古典Ⅰ乙	5	国語表現	2	国語表現	2	国語総合	4	現代文A	2	論理国語	4
古典乙Ⅱ	3	古典Ⅱ	3	現代文	3	現代文	4	現代文	4	現代文B	4	文学国語	4
必修修単位数	9または14	必修修単位数	9	必修修単位数	4	現代語	2	古典	4	古典A	2	国語表現	4
						古典Ⅰ	3	古典講読	2	古典B	4	古典探究	4
						古典Ⅱ	3	必修修単位数	4または2	必修修単位数	4または3または2	必修修単位数	4
						古典講読	2						
						必修修単位数	4						

2、『高等学校学習指導要領』における国語科必修修科目の「目標」の変遷

平成元年告示（「平成元年」）、平成 11 年告示（「平成 11 年」）、平成 21 年告示（「平成 21 年」）、それぞれの『高等学校学習指導要領』における必修修科目「国語Ⅰ」または「国語総合」の「1 目標」を比較すると、以下のとおりである（下線は筆者による。以下同じ）。

国語を的確に理解し適切に表現する能力を養うとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。
〈「平成元年」「国語Ⅰ」の「1 目標」〉

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

〈「平成 11 年」「国語総合」の「1 目標」〉

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

〈「平成 21 年」「国語総合」の「1 目標」〉

下線部は、「平成元年」・「平成 11 年」・「平成 21 年」間で「1 目標」の文言に異なりのみられる箇所である。「平成元年」と「平成 11 年」とで、「1 目標」の示す能力の育成について、〈理解／読解〉と〈表現〉の優先順位が逆転しており、〈表現〉の能力育成がより重視されるようになったことがわかる。これは、「平成 11 年」の「1 目標」に「伝え合う力」を高めることが示されていることと関わりがある。

平成 30 年告示の『高等学校学習指導要領』の国語科教育課程では、昭和 53 年告示の『高等学校学習指導要領』で設定された統合科目「国語Ⅰ」（「平成 11 年」以降は「国語総合」）が廃止され、新たに必修科目は「現代の国語」と「言語文化」の 2 科目となった。

次に示すように、この 2 科目の「1 目標」の前文、および、項目の(2)と(3)とはまったく同一の文章である⁴。この点において、「現代の国語」と「言語文化」は、それぞれ「平成 21 年」以前の国語科の統合科目の性格を残している。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（中略）

⁴「現代の国語」の「1 目標」の(1)は「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。」であり、「言語文化」の「1 目標」の(1)は「生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。」である。

(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

〈「平成 30 年」「現代の国語」の「1 目標」〉

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(中略)

(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

〈「平成 30 年」「言語文化」の「1 目標」〉

二重下線部は、「平成元年」・「平成 11 年」・「平成 21 年」の「目標」と比較して、「平成 30 年」の「目標」に新たに加えられた箇所である。「平成 11 年」・「平成 21 年」の「目標」に示されている「伝え合う力」は、「平成 30 年」では「他者との関わりの中で伝え合う力」に改められ、コミュニケーション能力の育成が指導目標であることが強調されている。

「平成 11 年」・「平成 21 年」の「適切に表現し的確に理解する能力」は、「平成 30 年」では「効果的に表現する資質・能力」に改められている。また、「平成 30 年」では、「論理的に考える力」・「言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度」が「目標」に加えられており、今期教育改革の主要な目標である「受け身の教育から能動的学習へ」の理念を反映しているものと考えられる。

3. 国語科必履修科目の「内容」にみられる指導内容の領域

国語科の必履修科目の「2 内容」における指導内容の領域について

「平成 21 年」までは、領域として、言語習得の 4 技能（話すこと・聞くこと・書く

こと・読むこと)の下位にあった「言語事項」または「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、「平成30年」では「知識及び技能」に改められ、また、「思考力・判断力・表現力等」と対等に位置づけられた。

「平成元年」・「平成11年」・「平成21年」・「平成30年」の『学習指導要領』にある国語科の必修科目の「2 内容」にみられる指導内容の領域を図式上で整理すると、【表3】のとおりとなる。

それまでの『高等学校学習指導要領』と比較すると、「平成30年」の『高等学校学習指導要領』の「2 内容」の最も大きな変化は、従来の「A 話すこと・聞くこと」・「B 書くこと」・「C 読むこと」(平成11年度から)と「言語事項」または「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という4領域の枠組みを根本的に変えたことにある。

【表3 必修科目の指導内容の領域】

平成元年	平成11年	平成21年	平成30年			
国語 I	国語総合	国語総合	現代の国語		言語文化	
A 表現	A 話すこと・聞くこと	A 話すこと・聞くこと	〔知識及び技能〕		〔知識及び技能〕	
B 理解	B 書くこと	B 書くこと	力〔 等〕 思考力・ 判断力・ 表現力	A 話すこと・聞くこと	力〔 等〕 思考力・ 表現力・ 判断力	A 書くこと
〔言語事項〕	C 読むこと	C 読むこと		B 書くこと		B 読むこと
	〔言語事項〕	〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕		C 読むこと		

4. 高等学校国語科古典教育の実態に関するアンケートによる意識調査

平成21年告示の『高等学校学習指導要領』の教育課程のもとで高等学校を卒業した大学学部生を対象として、高等学校の在学時に国語科の科目をどのように履修したか、また、古典科目とその学習についてどのような意識をもっているか、その実態について調査するために、以下の要領で質問紙によるアンケート調査を実施した。

(1) アンケート調査場所

都内にある私立文系4年制大学の初等中等教員養成系の学部。

(2) アンケート調査対象

卒業所要科目となる基礎的な内容の古典文学と古典文法についての講義(以下、「古典基礎」と仮称する)を履修・受講する学部1年生。

(3) 調査実施日と調査対象者の内訳

2017年5月10日、99名(男子39名・女子60名)。

2018 年 5 月 16 日、94 名（男子 41 名・女子 53 名）。

2019 年 5 月 15 日、99 名（男子 35 名・女子 64 名）。

（4）アンケートの質問内容

Q 1, 高等学校の 3 年間に受けた国語の授業科目のすべてに○をつけてください。

- ☐ 「国語総合」（週に 4 時間の授業、必修科目）
- ☐ 「国語表現」（週に 3 時間の授業、選択科目）
- ☐ 「現代文 A」（週に 2 時間の授業、選択科目）
- ☐ 「現代文 B」（週に 4 時間の授業、選択科目）
- ☐ 「古典 A」（週に 2 時間の授業、選択科目）
- ☐ 「古典 B」（週に 4 時間の授業、選択科目）

Q 2, 高等学校で古文の授業を受けた経験がありますか？

- ☐ ある ☐ ない ☐ 覚えていない

Q 3, 古文は好きですか？

- ☐ そう思う → Q 4 へ
- ☐ どちらかといえばそう思う → Q 4 へ
- ☐ 思わない → Q 5 へ

Q 4, 古文で面白いと思うところは何ですか？ あてはまるものに○をしてください（複数に○をしても良い）。

- ☐ 作品の内容。 ☐ 登場人物。
- ☐ 作品の歴史的背景。 ☐ 作品の社会的背景。
- ☐ 文学史。 ☐ 古い時代のことば。
- ☐ 古典文法。 ☐ ことばの語源。
- ☐ その他

Q 5, 古文が好きではない理由は何ですか？ あてはまるものに○をしてください（複数に○をしても良い）。

- ☐ 作品の内容がわからない。 ☐ 日本の歴史がわからない。
- ☐ 文法がわからない。 ☐ 古文の暗記がいやだ。
- ☐ 古文をきちんと勉強した経験がない。
- ☐ その他の理由

5, アンケート結果からみる高等学校で履修した国語科の科目

実施したアンケートの「Q 1, 高等学校の 3 年間に受けた国語の授業科目のすべてに○をつけてください。」の質問によって高等学校の間に履修した国語科の科目名を集約したものが【表 4】である。

国語科の教育課程においては「国語総合」が必履修科目のはずであるが、アンケートの各実施年とも調査人数の総数と「国語総合」を選択した人数とが一致していない。被調査者が高等学校在籍中の自分の履修した国語科科目名を記憶していない可能性が考えられるので、この質問項目の調査結果の信頼性は必ずしも高いものとはいえない。しかし、【表 4】の実数からみると、高等学校での国語科の教育課程として、必履修科目の「国語総合」に加え、選択科目として「現代文 B」（標準単位数 4 単位）・「古典 B」（標準単位数 4 単位）を選択する傾向のあることがわかる。アンケートの調査対象が文系の 4 年制大学の学部生であるので、高等学校で履修した国語科目の組み合わせの多くが「国語総合・現代文 B・古典 B」となっていたものと考えられる。

また、【表 4】によると、高等学校において「国語表現」（標準単位数 3 単位）を科目として選択した被調査者が調査期間のいずれも全体の 1 割程度にとどまっていることがわかる。「国語表現」は、平成 21 年告示『高等学校学習指導要領』の当該科目の「1 目標」に、「国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。」とあるように、「話すこと・書くこと」など国語の産出が学習活動の主軸におかれる科目であるが、調査対象の範囲では、「国語表現」の選択が敬遠される傾向にある。

これは、平成 11 年告示の『高等学校学習指導要領』以来、強調されてきた「伝え合う力を高める」という国語科の目標に対して、高等学校の教育課程編成が、実態として必ずしもその目標の達成に応ずるものになってはいなかったのではないかという懸念がある。

【表 4 高等学校で履修した国語科科目】

科目名 調査年・調査人数		国語総合	国語表現	現代文 A	現代文 B	古典 A	古典 B
2017年	99	90	10	37	75	41	74
2018年	94	82	17	36	77	39	76
2019年	99	80	10	39	86	37	85

次に、「Q 2，高等学校で古文の授業を受けた経験がありますか？」の回答を集計したものが【表 5】である。2017 年と 2018 年のアンケート実施時に「古文の授業を受けた経験がない」と回答した被調査者が 1 名ずついる。また、「古文の授業を受けた経験を覚えていない」と回答した被調査者も各年に 1～5 名みられる。「古文の授業を受けた経験がない」という回答が被調査者の学習歴の事実を反映したものであるかどうかは不明であるが、少なくとも、「古文の授業を受けた経験がない」と「覚えていない」という回答者においては、高等学校での国語科授業での古典の学習体験の記憶が極めて稀薄なものであったことが推測される。

【表 5 古文の授業を受けた経験】

	ある	ない	覚えていない	合計 (%)
2017年	97	1	1	99
	98.0	1.0	1.0	100.0
2018年	88	1	5	94
	93.6	1.1	5.3	100.0
2019年	95	0	4	99
	96.0	0.0	4.0	100.0

6，アンケート結果からみる高等学校の古典教育にある問題点

6-1，「古文は好きですか？」

実施したアンケートの「Q 3，古文は好きですか？」の回答を集計したものが【表 6】である。アンケートの回答形式で評価幅を三点にしたので、中間的な「どちらかといえばそう思う」という選択肢に回答数が集中するのは想定範囲内である。

注目すべきことは、「そう思う」と「そう思わない」の回答数の比率の差である。「古文が好き」と回答した被調査者は 3 回の調査を通じて全体の 16～17%に止まるのに対し、「古文が好きと思わない」と回答した被調査者は 3 回の調査を通じて全体の 37～48%であった。つまり、「古文が好き」と回答した大学生よりも、「古文が好きではない」と回答する大学生が常態的に 2～2.8 倍いるという顕著な結果が現われている。

当該アンケートの調査対象者が、私立文系 4 年制大学の初等中等教員養成系の学部生であること、また、大学学部の講義科目「古典基礎」の受講生であることなどを考慮すると、この結果は国語科の古典教育に携わる教員としてたいへん深刻なものとして受けとめざるを得ない。

【表 6 古文は好きですか】

	そう思う	どちらかとい えばそう思う	思わない	合計 (%)
2017年	16	44	39	99
	16.2	44.4	39.4	100.0
2018年	15	33	46	94
	16.0	35.1	48.9	100.0
2019年	17	45	37	99
	17.2	45.5	37.4	100.0

「Q 3, 古文は好きですか?」の選択肢で「そう思う・どちらかといえばそう思う」を選択した回答者を「Q 4, 古文で面白いと思うところは何ですか?」に誘導し、選択肢の複数回答可で得た結果を調査した各 3 回の合計数の多数順に整理したものが【表 7】である。

古典の「登場人物」に関心が集まるのは、古典文学の作品の内容そのものに関心に向いているものと考えられるが、「作品の歴史的背景」・「作品の社会的背景」を選択した回答数も多いのは、古典文学への興味と、歴史への関心との間に関係性があることを示唆している。つまり、古典が好きな学生は、歴史も好きである傾向があるということである。

また、少数ながらも、「古典文法」・「ことばの語源」・「古い時代のことば」など、古文の言語に関わる点に関心のある回答があるのは、「古文が好き」という被調査者の一部においては、言語学習への関心が内在する傾向があるものと考えられる。

【表 7 古文で面白いと思うところ】

調査年・調査人数	作品の 歴史的 背景	登場人 物	作品の 社会的 背景	古典文 法	ことば の語源	古い時 代のこ とば	文学史	その他
2017年 99	30	35	25	8	12	9	5	2
2018年 94	22	15	19	10	6	5	4	2
2019年 99	29	25	24	11	6	6	5	0
各項目の合計	81	75	68	29	24	20	14	4

問いの「古文で面白いと思うところは何か」の選択肢中に設けた自由記述欄における被調査者の回答の一部を原文のまま次に示す。選択肢の「その他」を選択せずに自由記述した被調査者がいたので、自由記述の数と「その他」の解答数とは一致していない。引用例の文末に西暦で調査年を示した（以下、同じ）。

自由記述をみると、百人一首など、体験的な古典との接触を含めて、文学としての古典そのものが好まれている例と、歴史的な関心との関わりや、現代語と異なる言語（古文）を理解することの語学的な達成感・満足感のあることなどが読みとれる。

- ・現代の考え方と交わる部分があるところ。(2018)
- ・今と違う考え方に触れられるところ。(2019)
- ・自分の力で読むことができたなら、楽しい、うれしい。(2019)
- ・言葉の表現方法。(2019)
- ・和歌。(2019)
- ・百人一首。(2019)
- ・古典の先生が好きだった。(2017)

6-2, 「古文が好きではない理由は何ですか？」

「Q 3, 古文は好きですか？」の選択肢で「思わない」を選択した回答者を「Q 5, 古文が好きではない理由は何ですか？」に誘導し、選択肢の複数回答可で得た結果を調査した各 3 回の合計数の多数順に整理したものが【表 8】である。

「作品の内容がわからない。」・「文法がわからない。」・「古文の暗記がいやだ。」を選択した回答者数が常に上位を占めている。「古文が好きではない」という回答者は、古典文法など、古典文が現代文と言語として異なる点に、語学学習上での苦手意識をもっている傾向が明確に現われている。

「古文をきちんと勉強した経験がない」と回答した者が、調査した各年に 1 割程度みられる。これは、【表 5】において「古文の授業を受けた経験がない」と「覚えていない」という回答者が 2～6%程度いることを考慮すると注目すべき結果である。

また、「日本の歴史がわからない。」を理由として選択する被調査者が各年とも一定数いるが、古典と日本史とには密接な関連性があるので、そもそも日本史や歴史に関心の薄い場合は古典にも関心がないことが多いということになる。

【表 8 古文が好きではない理由は何か】

調査年・調査人数		文法がわからない	古文の暗記がいやだ	作品の内容がわからない	日本の歴史がわからない	古文をきちんと勉強した経験がない	その他の理由
2017年	99	29	18	17	16	11	6
2018年	94	20	19	15	12	14	5
2019年	99	28	19	8	11	10	0
各項目の合計		77	56	40	39	35	11

問いの「古文が好きではない理由は何か」の選択肢中に設けた自由記述欄における被調査者の回答の一部を原文のまま次に示す。

- ・読みづらく正直楽しくないから。(2017)
- ・文自体の面白さがわからなく(原文のママ)、中途半端に現代文と似た文法や表現がありややこしいため。(2017)
- ・難しく感じる。(2017)
- ・読み方が難しい。(2017)
- ・何から勉強すればいいかわからない。歴史や言葉の意味など様々なものがあって難しい。(2017)
- ・単語や文法の意味を文章の前後からあてはめて考えていくのは難しいから。(2017)
- ・普段使わない言葉だから。(2018)
- ・内容やストーリーは好きなのですが、活用形や意味が複雑で覚えるのが苦手であり好きでなかったです。(2018)
- ・日本の言葉なのに現代文のようにスラスラと読めないから。(2019)
- ・読むことや内容を理解するのは楽しいけれど文法や活用が分からないから。(2019)
- ・内容を理解しても面白いと思えない。(2019)
- ・すぐ泣くしすぐ歌よむのがたいくつ。(2017)
- ・古典の授業の時分からないものがあり先生に「こんなのもできないの?」と言われ、やる気がなくなり嫌いになりました。(2019)

「古文が好きではない理由は何か」の選択肢での回答結果が自由記述でも反映されており、自由記述で目立つのは、古典に対する語学としての苦手意識である。古典は、文学として多様な表現と豊穡な内容を有するので多くの学生が興味関心をもつものと考

えられるのであるが、語学習得の壁がそれを阻んでいるようにも見える。

「内容を理解しても面白いと思えない。(2019)」、「すぐ泣くしすぐ歌よむのがたいくつ。(2017)」という自由記述には、古典の背景にある古代社会が現代社会と異なる社会であることへの違和感をもつ学生のいることが窺える。

また、高等学校の古典学習時の教員の言動で古典が嫌いになった旨の自由記述があるが、これは6-1の自由記述に、古典が好きであることの理由に「古典の先生が好きだった。(2017)」という記述がみられたことと表裏一体の内容である。古典教育に限らず、学生がその授業を好きになるか否かにおいて、指導する教師の学生に対する影響力は大きく、学習指導における教師の責任は重大であるといえよう。

おわりに

平成30年告示の『高等学校学習指導要領』によって、国語科の必修科目「国語総合」が廃止され、古典の教科が「言語文化」という独立した科目となる。科目の実施は令和5年(2023年)度からであるが、「言語文化」が高等学校国語科における古典教育の再興に繋がるものとなるかどうか、その推移を見守る必要がある。

【参考文献】

- 浅川哲也(2005a)「国語科教育と言語教育の関わりについて」『明星大学通信制大学院研究紀要—教育学研究—』Vol.5
- 浅川哲也(2005b)「古文は声に出して読めるのか—古文音読指導上の問題点—」『国語界』(全国高等学校国語科指導研究会)第52号
- 浅川哲也(2017)「国語科教職課程における「日本語学概論」の意義と問題点—〈五十音図〉を正確に書けない大学生—」『首都大学東京教職課程紀要』第1集
- 浅川哲也(2018)「高等学校学習指導要領の改訂が国語科古典教育に与えた影響について」『首都大学東京教職課程紀要』第2集
- 安西佑一郎(2017)「戦後最大の教育改革が進行中」『サービソロジー』4巻2号
- 山下直(2018)「『言語文化』はどのような科目か—『現代文A』『古典A』との関わりから—」『日本語学』第37巻12号
- 高木展郎(2019)「『国語総合』から必修科目『現代の国語』と『言語文化』への変更の意味」『日本語学』第38巻9号